

近代日本の夜明けーラトガース¹ 大学の果たした役割ー

加 島 巧

A Dawn of Japanese Modernization - Rutgers College Graduates -

KASHIMA Takumi

Abstracts

Commodore Matthew Calbraith Perry's arrival at Uruga Harbor on 1853 and 1854 put an end to the Tokugawa government's isolation policy. It was the event that made the Japanese sense the dawning of modernization. There were two ways for the Japanese to modernize Japan. To invite foreigners who had a variety of knowledge was one thing. To send young Japanese to foreign countries to learn was another.

There is a college named Rutgers in New Brunswick, New Jersey. In the last days of the Tokugawa and the beginning of Meiji period, some missionaries came to Japan from America. Most of them were sent from the Dutch Reformed Church. Some of them were Rutgers College graduates. They played an important role, especially in education. William Elliot Griffis, graduate of Rutgers College in 1869, delivered a speech entitled "The Rutgers Graduates in Japan" in 1885. In the speech, Griffis introduced Rutgers College graduates who had gone to Japan. In this paper, the author retraced the steps of 10 Rutgers graduates who had gone to Japan across the Pacific Ocean and evaluated their achievements.

序

1853年（嘉永6年）、1854年（嘉永7年）のペリー来航で鎖国に終止符が打たれたとすれば、それは、とりもなおさず近代日本の夜明けが始まったことを意味する。日本が明治という時代を迎えるのは、1868年のことであるので、ペリーの来航から15年後ということになる。明治時代は日本が西欧の列強国に追いつこうとした時代であるが、その近代化を進める一つの手段は外国から人材を登用することであり、もう一つは優秀な日本人を外国に留学させることであった。明治という時代を待たずに藩の中には外国の文化を取り入れ始めようとするところもあった。渡航禁止令がなくなるのは1866年（慶應2年）5月23日のことである。²

¹ この論文では「ラトガース」と表記する。梅溪昇著『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』（日経新書 昭和40年）では「ラッガース」と表記されている。

² 宣教師S.R.ブラウン（4-1-3. を参照のこと）は同年6月4日付の、改革派教会外国伝道局総主事のジョン・メーソン・フェリス（4-1-9. を参照のこと）宛の手紙には、渡航禁止令のことを「この国の政府がとった政策のうち、最も積極的な態度の一つである」と書いている。高谷道男（訳）『S.R.ブラウン書簡集』（日本基督教団出版局1980年）pp.183-184

アメリカの東海岸、ニュージャージー州ニューブランズウィックにラトガース大学という州立大学 (Rutgers, The State University of New Jersey) がある。この大学は、近代日本の夜明けを迎える日本にとって大きな役割を果たした。その役割とは、先に述べた外国人の登用と日本人の留学という二つの点である。この小論では、ウィリアム・グリフィス (William Elliot Griffis) (1843-1928) が1885年6月に行った講演 "The Rutgers Graduates in Japan" (『日本におけるラトガース卒業生』) を元に、その中で触れられているラトガースカレッジの卒業生について紹介し、幕末から明治にかけて日本に滞在したラトガースカレッジで学んだ人々の果たした役割について考えてみたい。

1. The Rutgers Graduates in Japan³ (『日本におけるラトガース卒業生』) について

この本は、1885年6月16日にラトガースカレッジのカークパトリックチャペルで行われた講演をまとめたものである。講演者は1869年度と同大学の卒業生、William Elliot Griffis で、講演は大学理事、学長、教員、同窓生を対象に行われた。講演後に本の形にまとめられた。その約30年後にラトガースカレッジは創立150周年を迎えることになるのだが、それを記念する文献の一つとして第二版が出版されることとなった。

第二版には、第一版の序文に加え、第二版の序文も書かれており、そこには、1853年に来航したペリーの旗艦ミシシッピー号 (黒船) を視察した佐久間象山 (1811 (文化8年) - 1864 (元治元年)) と吉田松陰 (1830 (文政13年) - 1859 (安政6年)) の二人を海外に目を向ける日本人の先駆者だと評したり、1859年から1868年にかけて日本が新しい時代の転換期を迎えようとしていた時に、長崎にいたフルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck 1830-1898) が進歩的な藩の学生に教授していること、日本の若者の留学や、外国人の受け入れの世話をしていたことが書かれている。講演で述べられた日本人名をそのまま引用すれば、フルベッキは、Kusakabe⁴, Tatsu⁵, Asahi⁶,そしてKatsu⁷

³ この本を蔵書検索WWW-OPACKで検索してみると、日本国内には京都にある国際日本文化研究センターに所蔵されていることが分かった。これは、1886年に出版された第一版のようである。その後、1916年の改定版がインターネット上で公開されていることが判明した。この論文で使用したテキストは、改訂版である。

<http://images.rca.org/docs/archives/rujapangrads/pdf>

⁴ 日下部太郎 (1845-1870) ラトガースカレッジ留学中病死

⁵ 岩倉具経 (1853-1890) 別名：龍 (りゅう) 小二郎 岩倉具視の三男

小松清 (訳) が『明治文化研究 昭和2年4・5・6月号』で、グリフィスの講演を紹介している。その中で、「前述の総理大臣とは即ち岩倉具視であって彼の三人の子息、朝日、南、辰 (Tatsu) はニューブランズウィックで教育を受けさせた。」(The prime minister referred to was Iwakura Tomomi, whose three sons Asahi, Minami and Tatsu were educated at New Brunswick. p.13) と言う部分がある。そのことからTatsu は岩倉具経と判断した。

中拂仁は同じ箇所を「先の首相というのは岩倉具視で、彼の3人の子息、旭、南、龍はニューブランズウィックで教育を受けました。」と訳出している。「ラットガース大学卒業生の滞日活動 (1)」『国士館大学政経論叢 (94)』1995年p.64

W.E. Griffis: *Verbeck of Japan*, The Caxton Press, 1900, pp.199-200には同様のことが書いてあり、1870年4月21日付けのフェリス宛にフルベッキが江戸から出した手紙が引用されており、旭と龍のことも書いてある。高谷道男 (編・訳) 『フルベッキ書簡集』(新教出版社 1978年) p.173

⁶ 岩倉具定 (1851-1910) 別名：旭小太郎 岩倉具視の次男 ニューブランズウィック留学

⁷ 勝小鹿 (1852-1892) アナポリス海軍兵学校留学

のアメリカ行きの世話をしていたともグリフィスは書いている。その後にIse⁸とNumagawa⁹はすでに、日本を出発していたとの記述もある。

その後、明治政府になり、アメリカに留学する者が増えてくるのだが、1915年（大正5年）には650人以上の日本の男女が159のアメリカの学校に学び、21の学生組織があり、18人の日本人がアメリカの大学で教鞭を取っていたと序文には述べられている。

さて、第一版と第二版との違いであるが、講演のあった1885年から30年経った1916年の出版であるので、講演自体には変化はないのであるが、脚注や説明、その後の付け加え等が加えられている。この章を終えるにあたり、「注釈と付録」(Notes and Appendices)の部分の初版と第二版の対比をまとめておく。この部分は、幕末明治初期の日本人留学生に関する貴重な史的価値を持っているのである。¹⁰

NOTES AND APPENDICES	第一版	第二版
I THE RUTGERS GRADUATES IN JAPAN	p.19	pp.19-20
II THE JAPANESE STUDENTS IN AMERICA AND EUROPE	pp.20-21	pp.20-21
III JAPANESE STUDENTS IN RUTGERS COLLEGE	p.21	p.21
IV PERSONAL NOTICES	pp.21-26	pp.21-28
V INSCRIPTIONS OF THE MONUMENTS IN THE JAPANESE LOT IN WILLOW GROVE CEMETERY, NEW BRUSWICK, N.J.	pp.26-27	pp.28-29
VI MISSIONARIES OF THE REFORMED CHURCH IN AMERICA IN JAPAN	pp.27-28	pp.29-30
VII BIBLIOGRAPHY	p.29	pp.31-32
VIII HOW THE JAPANESE CAME TO NEW BRUNSWICK	pp.30-32	pp.32-35
IX OFFICIAL ACKNOWLEDGEMENT OF THE MIKADO'S AMBASSADORS, IWAKURA AND OKUBO	p.32	p.36

2. 講演者William Elliot Griffis

この講演を行ったグリフィスについて述べる。彼は、1843年にペンシルベニア州フィラデルフィアに生まれる。南北戦争に従軍した後、ラトガースカレッジに入学するのが1865年のことである。在学中に福井藩からの留学生日下部太郎と親交を結ぶことになる。それが縁となり、後に「お雇い外国人」として福井に赴任することとなる。1869年に卒業後にオランダ改革派教会の神学校（現在のニューブランズウィック神学校）で学ぶ。

1870年（明治3年）に第16代越前福井藩主松平春嶽（1828（文政11年）－1890（明治13年））から近代的な学校の設立の要請を受け、翌年福井に到着する。福井藩の藩校明新館で4月から翌年1月まで理科を教えた。¹¹ 1871年（明治4年）に彼は福井を離れ、東京大学の前身である大学南校に移る。その理由は、フルベッキなどの要請もあろうが、廃藩置県でグリフィスと契約をしていた福井藩が消滅したことも考えられる。しかし、1871年（明治4年）から福井が敦賀県に合併される1873年（明治

⁸ 横井佐平太（1845－1875）別名：伊勢佐太郎 ラトガースカレッジ、アナポリス海軍兵学校留学

⁹ 横井太平（1850－1871）別名：沼川三郎 ラトガースカレッジ留学

¹⁰ 梅溪 昇著『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』（日経新書 昭和40年）p.20

6年) 1月まで明新館は福井中学と名称は変えたが、藩校の伝統はその間も存続した。福井藩士横井小楠¹² (1809 (文化6年) - 1869 (明治元年)) の門下生であった村田氏寿 (1821 (文政4年) - 1899 (明治32年)) が県知事となったからであろうか、福井は越前地方の旧六藩の中で、当時藩校を閉鎖しなかった唯一の藩であった。¹³ 東京では1874年 (明治7年) まで物理、化学、精神科学などを教授し、帰国する。山下英一によれば、ここまでをグリフィスの第一期とし、修行時代と教師時代と定義している。¹⁴

山下英一の区分に従えば、グリフィスの生涯の第二期は帰国から還暦までの期間となる。その時代は牧師時代と執筆時代と定義できる。グリフィスは日本から帰国すると翌年ニューヨークにあるユニオン神学校に入学する。1877年に卒業後は1903年に60歳を迎えるまで、牧師として勤めた。この第二期は牧師時代であるが、同時に著作を開始した時代でもある。この時代で特筆しなければならない著書を二つ挙げておく。一つは、帰国直後の1876年に表した *The Mikado's Empire*¹⁵ である。この本は、その後も増補訂正が加えられ、1913年の第12版が最終版となっている。もう一冊は1900年に出版した *Verbeck of Japan*¹⁶ である。フルベッキは福井藩から理科の教師を探すように依頼されたが、アメリカのオランダ改革派伝道局主事であったジョン・フェリスに人選を頼む。その結果選ばれたのがグリフィスであった。グリフィスは福井藩の明新館から東京の大学南校に移るが、その時にフルベッキは南校の教頭をしていた。この二冊の著作に加え、この時代の1901年にグリフィスは「YATOI (やとい) に関する調査」を実施している。アメリカからの「お雇い外国人」は200名ほどいたのであるが、グリフィスは世界的な調査を行った。質問葉書には写真や印刷物の提出もともとめ、次の9項目におよぶ質問調査を行ったが、残念ながら回収成績はよくなかった。

- 「1. 生年月日 2. 教育 (学歴) 3. 日本に雇用された事情 4. 来日および離日の時期
5. 日本人への奉仕内容 6. 奉仕後の記録と経歴の概略 7. 現存しないときは死亡の時期
8. 妻および子孫に関する明細 9. 他のお雇い外国人についての情報」¹⁷

第三期は死去する1928年までであるが、この時代に彼はもっぱら著述に専念する。その間、1908年

¹¹ 福井におけるW・E・グリフィスの教育については、蔵原三雪氏の次の論考が参考になる。

「W・E・グリフィスの明新館における教育活動」『武蔵丘短期大学紀要』第2号 1994年

「明新館におけるW・E・グリフィスの科学授業」『武蔵丘短期大学紀要』第3号 1995年

グリフィスは理学部の卒業であるので、科学の授業に力を入れ、教室も充実したものにしようと心がけたのであろうが、これは、次章で触れる「モリル法」の影響かもしれない。

¹² 横井佐平太・横井太平の叔父

¹³ 本山幸彦「福井藩の教育制度とウィリアム・エリオット・グリフィス」p.281『近代化の推進者たち—留学生・お雇い外国人と明治—』(アーダス・バークス編 梅溪昇監訳) (思文閣出版1990年)

¹⁴ 山下英一「グリフィスの福井生活」福井県文書館県史講座記録 (福井県文書館 平成20年6月) p.2

¹⁵ 日本語訳は第一部が亀井俊介訳で (『ミカド』) 研究社と岩波文庫から、第二部が山下英一訳で (『明治日本体験記』) 平凡社東洋文庫から出ている。

¹⁶ 日本語訳は『新訳考証 日本のフルベッキ —無国籍の宣教師フルベッキの生涯—』というタイトルで洋学堂書店より平成15年に出版されている。(松浦玲監修 村瀬寿代訳編)

¹⁷ 梅溪昇『お雇い外国人① 概説』(鹿島研究所出版会 昭和43年) pp.218-219

(明治41年)には日本政府より勲4等旭日章を、1926年(昭和元年)には勲3等旭日章を授与される。1927年(昭和2年)には福井を訪問。翌年2月5日に避寒先のフロリダ州で死去する。2月6日付けの*New York Times* は次のような記事を掲載して彼の死を報じた。

DR. GRIFFIS, FRIEND OF JAPAN, DIES; Educator Who Helped Japanese Adapt Themselves to Western Civilization. THE END AT 85, IN FLORIDA Returned Only Last Year from Japan After Being Decorated Second Time by an Emperor.¹⁸

彼の死後、彼の残した書籍、手紙などは Griffis Collection¹⁹ としてラトガース大学に保管されていて、幕末・明治期の日米交流の貴重な資料となっている。

3. The Rutgers College

アメリカの大学の歴史は、アメリカ移民の歴史とともに始まる。ヨーロッパからの移民は東海岸に到達するので、東海岸はアメリカの大学の発祥の地であった。移民が増え、コロニーが増えるに従い、人々は聖職者を必要とした。1636年に創立されたハーバード大学も聖職者や社会のリーダーとなる人を育てる目的で全人教育を行うリベラルアーツカレッジであった。1776年の独立宣言までに設立された大学は15校。以下の表に示すように9校が現在も存続している。²⁰ そのいずれもキリスト教の会派と深いつながりがあった。

創立年	創立時の大学名	現在の大学名	キリストの会派
1636	Harvard		清教徒
1693	William and Mary		聖公会
1701	Yale		会衆派
1746	New Jersey	Princeton	長老派
1754	King's	Columbia	聖公会
1755	Philadelphia	Pennsylvania	無宗派
1764	Rhode Island	Brown	バプテスト
1766	Queen's	Rutgers	オランダ改革派教会
1769	Dartmouth		会衆派

さて、ラトガース大学であるが、1766年当時のイギリス国王ジョージ3世(1738-1820在位1760-1820)の王妃シャーロット(1744-1818)を称え、クイーンズカレッジという名称で設立された。オランダ改革派の牧師養成と子弟の教育が目的であり、大学入学前の教育機関としてグラマースクールも作られた。

¹⁸ *The New York Times Archives*

¹⁹ <http://www.libraries.rutgers.edu/rul/libs/scua/griffis/griff.shtml> (2009年8月20日)

島田正(編集代表)『ザ・ヤトイーお雇い外国人の総合的研究』(思文閣出版1987年)の中のクラーク・ベック「お雇い研究のための一次原稿及び印刷資料ーラトガース大学にあるW・E・グリフィス文書コレクション」(pp.333-340)と平泉宏「グリフィス・コレクションについて」(pp.341-349)の二つの論考も参考になる。

²⁰ 中山茂『大学とアメリカ社会 日本人の視点から』(朝日選書492 1994年) pp.13-15

1766年にクイーンズカレッジは設立されるものの、その10年後の1776年に独立戦争が起こる。その後地域の拡大や、米英戦争（1812年）などが起こるなかで、クイーンズカレッジは2度の閉校を余儀なくされる事態を迎えた。²¹ そこに助け船を出したのがオランダ改革派教会の信者で独立戦争の英雄でもあったヘンリー・ラトガス（1745-1830）である。

ヘンリー・ラトガス（キングズカレッジ出身）は慈善事業にも熱心で、マンハッタンに所有していた広大な土地を売り、学校や教会そして慈善事業に多額の寄付を行った。マンハッタンには、ヘンリー通とラトガス通がある。また、そこにある教会にも彼にちなみラトガスプレズビテリアン教会と名づけられた。そのヘンリー・ラトガスの最も大きな貢献は、経済的理由で一時的に閉校していたクイーンズカレッジへの5,000ドルの寄付である。この寄付のお陰で大学は再開された。1825年にクイーンズカレッジはラトガスカレッジと名前を変える。その後1924年にはラトガス大学となった。

1636年のハーバード大学の設立から1769年のダートマス大学の設立の時代は、アメリカの大学の歴史²²において第一期と呼ぶことができよう。五島敦子の表現を借りれば、「植民地期のカレッジ」²³ となり、そこでの教育の目標は聖職者とリーダーの養成であった。17世紀のハーバードの卒業生のうち、3分の2が聖職に就いた²⁴ との引用を五島敦子は「アメリカの大学の社会貢献理念ー定義と歴史の変遷の検討ー」の中で示している。

モリル法（Morrill Act of 1862）という法律が1862年に成立する。この法律は連邦政府の土地を州に譲渡し、それを売却した資金で農学・工学などを教える学部を作るという法案である。私立大学でも州政府から財政支援は行われていたが、この法律によりラトガスカレッジは1864年にニュージャージー州のランド・グラント・カレッジ（land-grant college=土地交付大学）となり、州との関係を深めてゆく。²⁵ 教養教育に加え、実学の教育も始まることになる。ニュージャージー州では、プリンストン大学とラトガスカレッジの二つが争うが、ラトガスカレッジが選ばれ、そこには、人文学部に加え、1865年に科学部が設立されることとなる。ラトガス大学は1945年と1956年のニュージャージー州議会の法律により州立大学へと変貌を遂げる。ラトガスカレッジはこのモリル法で創立時の宗教的な大学から脱皮したと言える。その時期に日本との関係が始まるのであるが、このモリル法によるラトガスカレッジの活気は、その当時の日本人留学生やラトガスカレッジの卒業生によって日本に有形・無形の形で持ち込まれたことは間違いがないであろう。²⁶

²¹ 一度目は1795年で、1808年に再開。二度目は1812年で1825年に再開。cf. History of Rutgers University http://en.wikipedia.org/wiki/History_of_Rutgers_University (2009年8月21日)

Rutgers Through the Years <http://ruweb.rutgers.edu/timeline/timeins.html> (2009年8月21日)

²² 中山茂：前掲書 p.4 によれば、アメリカの大学の歴史を（1）植民地時代からの伝統ある紳士教育、専門化しない一般教育のためのリベラルアーツカレッジ（2）南北戦争以後にできて発展した職業教育のための州立・土地付与大学（3）研究のための大学院（4）戦後の、万人の庶民教育のためのコミュニティ・カレッジの四つの区分で示している。

²³ 五島敦子「アメリカの大学の社会貢献理念ー定義と歴史の変遷の検討ー」p.136 『南山短期大学紀要』第34号 2006年

²⁴ 五島敦子：前掲書 p.129

²⁵ 宮田由紀夫「産学連携講座 ホームページ版 アメリカの大学における研究活動」

http://www.kansai-ventur.org/mm_backnumbers/miyama_mm_no2.html (2009年8月22日)

²⁶ 羽田積男「モリル法（1862年）の私立大学の改革ーラトガス大学科学学校の成立をめぐるー」『教育史学会紀要28巻』1985年 pp.110-130

4-1. ラトガースの卒業生

この章では、グリフィスの1885年6月16日に行った講演から、日本におけるラトガースカレッジの卒業生についてその動向を探ることとする。1916年に講演集を改定するにあたり、1885年以降の卒業生も扱われている。

グリフィスの講演集では、次の14名の名前が挙がっているが、この章では、ロバート・H. プリュウインからN. H. デイマレストまでの9名に加え、講演では漏れていたヘンリー・スタウト（1865年卒）を加えた10名を扱うこととする。この章をまとめるにあたっては、講演集に加え、講演集と同じ大学創立150周年に出版された*Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916*²⁷ を利用した。この資料もpdfファイルで公開されている。併せて、ラトガース大学は、Inventory to the Rutgers University Biographical Files: Alumni (Classes of 1774-1922)²⁸ というホームページを公開しておりこれも利用した。

氏名	卒業年度	日本での滞在先	日本での滞在期間
Robert H. Pruyn	1833	江戸	1861-1865
James H. Ballagh	1857	横浜	1861-1916
Robert Morison Brown	1865	新潟・横浜	1866-1900
William Elliot Griffis	1869	福井・東京	1870-1874
Edward Warren Clark	1869	静岡・東京	1871-1875
Martin N. Wyckoff	1872	福井・新潟・東京	1872-1911
Howard Harris	1873	横浜	1881-1901
Eugene S. Booth	1876	長崎・横浜	1879-1916
N.H. Demarest	1880	長崎	1883-1900
Henry Stout	1865	長崎	1869-1906

4-1-1. Robert H. Pruyn (ロバート・H・プリューイン) (1815-1882) 1833年卒

Born at Albany, N.Y., Feb. 14, 1815. Lawyer. U.S. Minister to Japan. Member, N.Y. State Constitutional Convention. Pres. Dudley Observatory. Trustee, Rutgers. 1853-82. A.M. (Rutgers, 1836). LL.D. (Rutgers). Died, Feb. 26, 1882.²⁹

元々はオランダからの移民の出で、ニューヨークで生まれ、ラトガース大学で学士号（1833年）、修士号（1836年）を取得後に法曹界で活躍する。1841年から46年まで、そして1851年には軍事法務総監となった。政治的な活動はニューヨーク州議会議員や議長を歴任する。1855年には州兵部隊の軍務

²⁷ <http://www.archive.org/details/catalogueoffic00rutgrich> (2009年8月22日)

²⁸ <http://www2.scc.rutgers.edu/ead/uarchives/studentbiofiles1f.html> (2009年8月23日)

²⁹ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.84

局長に任命される。国務長官であったスワード (William Henry Seward)³⁰ (1801-71) の要望でリンカーン (Abraham Lincoln) 大統領 (1809-65) が駐日公使に任命する。

ペリーの来航から2年後の1856年 (安政3年) にタウンゼント・ハリス (Townsend Harris)³¹ (1804-78) が初代公使として下田玉泉寺に領事館を構える。³² ハリスは1862年 (文久2年) 4月に帰国するまで5年9ヶ月の滞在であった。その後任がプルーインである。彼は1862年 (文久2年) 4月から1865年 (元治2年) 3月までの丸三年滞在する。着任半年後には生麦事件³³ (1862年 (文久2年) 9月14日) が起こり、その後薩英戦争 (1863年 (文久3年) 8月)、下関戦争 (馬関戦争) (1863年 (文久3年) 5月~6月、1864年 (文久4年) 7月~8月) が起こった。日本国内が不安定だけでなく、アメリカ国内も南北戦争 (1861-1865) が起こっており、プルーインの日本滞在はそのような時代であった。

つぎに示すイラストは、横浜で下関出撃を協議するフランス、イギリス、アメリカ三国の外交官と提督というタイトルで1864年2月20日号の「ル・モンド・イリュストレ」に掲載されたものである³⁴。プルーインは右端の人物である。



帰国後の1865年にWilliams College より法学博士号を授与され、理事となる。国立商業銀行総裁にも就任し、1866年にはニューヨーク州副知事候補にもなった。1882年に死去する。

4-1-2. James H. Ballagh (ジェームズ・H. バラ) 1857年卒

JAMES HAMILTON BALLAGH,

Born at Odel's Lake, N.Y., Sept. 7, 1832. Clergyman, R.C.A. Missionary to Japan.

³⁰ 1867年にロシアとアラスカ購入について交渉した人物。

³¹ *The Barbarian and the Geisha* (『黒船』) 1958年20世紀フォックス配給では、ジョン・ウェインがタウンゼント・ハリスを演じている。

³² その後麻布の善福寺に移る。長崎大学付属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベースの目録番号5375はベアトが1863年に写した写真である。

³³ 吉村昭『生麦事件』(新潮文庫 上・下 平成14年)の上巻では、双方の仲介役としてのプルーインが描かれている。

³⁴ B.M.アレン著 庄田元男訳『アーネスト・サトウ伝』(東洋文庫648 1999年) p.49

1861- . N.B. Sem., 1860 A.M. (Rutgers, 1860) . D.D. (Rutgers, 1906)³⁵

ジェームズ・ハミルトン・バラは1832年にニューヨーク州オーデルズ・レイクで生まれた。一家がニューヨークに移る際に雑貨商に奉公に出る。ラトガース大学入学が1853年、57年の卒業後はニューブランズウィック神学校に進み、1860年に卒業。翌61年（文久元年）に日本に向かい、横浜に到着する。矢野元隆がバラの日本語教師になるのであるが、彼は日本で最初に洗礼を受けた人物である。時は1865年（慶応元年）のことであった。1871年（明治3年）に横浜海岸教会の隣に英語を教える私塾を開く。

1906年（明治40年）にはラトガース大学より神学博士の学位を授与される。翌年婦人が横浜で死去する。ジェームズ・バラは1920年バージニア州リッチモンドで死亡する。

宮城県仙台市に宮城学院という学校法人がある。宮城学院は1886年（明治19年）に設立された「宮城女学校」から始まった。その120年史を見てみると、1886年9月18日に押方方義牧師ら日本キリスト者とウイリアムE・ホーイら合衆国改革派会宣教師により「宮城女学校」創立とある。³⁶ その初代校主押方方義は横浜バンド³⁷の一人J.H.バラから洗礼を受けた。宮城学院の『宮城学院 眼で見る120年』には1886年（明治19年）に開催された日本基督一致教会 第一回宮城中会の写真も掲載されており、それには押方方義とバラと一緒に写った写真も掲載されている。

メアリー・パトナム・プリーイン (Mary Putnum Pruyn, 1820-1884) という女性がいた。彼女は、米国夫人一致外国伝道協会 (The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands) から派遣され、来日した。1871年のことである。「メアリ・プラインの『おばあちゃんの日本便り』(1877)」を表した戸田徹子の論考の中に次のような箇所がある。

1869年、プライン宅にジェームズ・バラが滞在する機会があった。プライン家の男性はラトガース大学に進学するのが習わしで、メアリの他界した夫サミュエルも同大学の卒業生であり、バラとは同窓だった。またプライン一族の一人R・H・プラインは1861年から65年まで駐日公使を務めており、バラとは何らかのつながりがあったと思われる。³⁸

4-1-3. Robert Morrison Brown (ロバート・M・ブラウン) 1865年卒

ROBERT MORRISON BROWN,

Born, 1844. Secretary, Chinese Engineering and Mining Co. Private Co. G. 25th

³⁵ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.122

安藤美登里「J・H・バラ」『昭和女子大学近代文学研究叢書』(第19巻) (昭和37年) も参考にした。

³⁶ 『宮城学院 眼で見る120年』編集委員会 (編) 『宮城学院 眼で見る120年』(2006年) pp.9-10

³⁷ 横浜バンド: (bandは集団の意) アメリカ人牧師バラ (James Hamilton Ballagh 1832-1920) を中心に、1872年横浜居留地で結成されたプレテスタントの青年集団。植村正久・井深梶之助らが輩出 (広辞苑第6版)

³⁸ 戸田徹子「メアリ・プラインの『おばあちゃんの日本便り』(1877)」『山梨県立大学国際政策学部紀要』2008年 p.84 また、1873年5月には、友人の息子であるE・W・クラーク (4-1-6. を参照のこと) を訪ねている。(戸田徹子: 前掲書 p.91)

Conn. Vols. A.M. (Rutgers, 1868). Died, Feb. 18, 1900³⁹

ロバート・モリソン・ブラウンは1844年の生まれとあるが、父親のS.R.ブラウンの年譜によれば、1842年に香港で生まれたことになっている。⁴⁰ ラトガース大学は1865年に卒業している。父親については、アメリカ改革派教会が送った最初の3人の宣教師の一人であり、彼にちなんで名づけられたブラウン塾は後に明治学院大学へと姿を変えることとなった。初期の塾生の中には、4-1-2. でも触れた押方方義もいた。

さて、S.R.ブラウンの長男であるロバート・モリソン・ブラウンに関する資料は見つけることができなかった。南北戦争でコネチカット州第25師団G歩兵中隊の一員として従軍しているようであるが、確認することは出来なかった。⁴¹

1859年（安政6年）に日本に来航中の船の中で認めた手紙がある。船中の出来事を日記風に書いているが、その中に、「航海しているわたしたちの仲間は、たいへん親しく、ケビンにいるもの総勢18名、お互いになかよくしようと努めてきました。」という描写と「親愛なる兄弟よ、わたしは愛するものをあとに残し、ダッチ（リフォームド）教会の、この宣教の旅に出て行くことを、最大の特権と思っています。妻と娘とはむろんわたしと同じ考えです。」という記述がある。⁴² S.R.ブラウン書簡集の編訳者である高谷道男は、次のような注を付けている。

最初の部分は「S.R.ブラウン、同夫人、長女、次男、次女、ドクトル・シモンズ、同夫人、G・F・フルベッキ、同夫人、ミス・C・E・アドリアンス、フランク・ホールズ」、次は「長女Julia Maria Lowder (12.2.1840-18.8.1919) 横浜でイギリス領事館員ラウダー氏と結婚し、明治、大正にいたるまで日本にとどまり、夫死亡後も未亡人として横須賀日本基督教会にて、海軍士官や商船学校の学生やその他日本の船員をキリスト教に導いた。大田海軍少佐や、東洋汽船会社の船長、故山傑儀一氏などに感化を与えた。横浜外人墓地に葬らる。次男、ハワード・ブラウン、次女、ハリエット・ブラウン（一般にハッティ・ブラウンとよばれていた）1873年（明治6年）から1875年（明治8年）までブラウン塾の英語教師をした。長男ロバート・モリソン・ブラウンは当時、アメリカ、ニュージャージー州、ニューブランズウィック市のラトガース大学に在学中であった。⁴³

³⁹ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p. 141

松本喜美子・佐々木満子「S・R・ブラウン」『昭和女子大学近代文学研究叢書』（第1巻）（昭和31年）も参考にした。

⁴⁰ 高谷道男（編・訳）『S.R.ブラウン書簡集』（日本基督教団出版会 1965年）p.369

⁴¹ *The Twenty-fifth regiment, Connecticut volunteers in the war of the rebellion; history, reminiscences, description of battle of Irish Bend, carrying of pay roll, roster* (1913)

<http://www.archive.org/details/connvolrebel00connrich> (2009年8月24日)

⁴² 高谷道男（編・訳）：前掲書 pp. 9-13

⁴³ 高谷道男（編・訳）：前掲書 pp.13-14

⁴⁴ William H.S. Demarest : *A History of Rutgers College 1766-1924* Rutgers College 1924, p.440

*A History of Rutgers College, 1766-1924*によれば、1865年卒の彼は、日本で仕事をし、一時期はハワイの駐日領事の仕事をしていたとの記述がある。⁴⁴ 山下英一は「1866年来日、福音書の翻訳にうちこむ父の家にて生徒を教えた。」としている。⁴⁵

4-1-4. Henry Stout (ヘンリー・スタウト) 1865年卒

HENRY STOUT,

Born at Raritan, N.J., Jan. 19, 1838. Clergyman, R.C.A. Missionary to Japan, 1868-1906. Published first hymn book in Japanese language. Author, History of South Japan Mission. N.B. Sem., 1868. A.M. (Rutgers, 1868). D.D. (Rutgers, 1803).

Died, Feb. 16, 1912⁴⁶

ヘンリー・スタウトは1838年にニュージャージー州ラリタンで生まれた。ラトガースを卒業したのは1865年であるので、4-1-3. のロバート・モリソン・ブラウンとは同級ということになる。ニューブランズウィック神学校を卒業後の1868年に日本に向かうが、済美館（前身は長崎洋学所、済美館は廃止され、廣運館と姿を変える）で教えていたフルベッキの後任であった。フルベッキは東京の開成学校の教頭と呼ばれていたため、スタウトが到着すると長崎を去った。スタウトの長崎到着は1869年（明治2年）3月のことであった。スタウトの業績の一つは、賛美歌の出版である。1874年（明治7年）にJ.C.デビソンと『賛美のうた』を出版した。

スタウト夫妻は1872年（明治5年）に長崎市に英語塾「スタージェス・セミナー」を開く。スタージェス・セミナーは後に梅香崎女学校となる。長老派教会牧師の服部章蔵は山口市に光塩学校をつくる。光塩学校は山口英和女学校となり、後に光城女学院と改名する。長崎の梅香崎女学校と光城女学院が合併し、山口県下関市に梅光女学院が成立した。

ヘンリー・スタウトの妻エリザベスは1902年（明治35年）に長崎で死去する。スタウトは1906年に帰国し、1912年2月16日に死去した。⁴⁷

4-1-5. William Elliot Griffis (ウィリアム・E・グリフィス) 1869年卒

WILLIAM ELLIOT GRIFFIS,

Born at Philadelphia, Penn., Sept. 17, 1843. Cong'l clergyman. Lecturer. Superintendent, Education, Fukin, Japan, 1871. Prof. Imperial Univ., Tokio, 1872-74. Author of "The Mikado's Empire" and many other books on Japan, Holland, & c. A.M.

⁴⁵ 山下英一『グリフィスと福井』（福井県郷土誌懇談会 昭和54年）p.20

⁴⁶ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.141

⁴⁷ ヘンリー・スタウトの項は井川直衛（編）『東山五拾年史』（東山学院 昭和8年）などを参考にした。

⁴⁸ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.148

(Rutgers, 1872). Union Sem., 1877. D.D. (Union, 1884). L.H.D. (Rutgers, 1899).⁴⁸

W. E. グリフィスについては講演者として2章で書いているので、ここでは、彼の主著の一つである『皇国』から面白い箇所を紹介することにする。『皇国』は2部に分かれている。第一部は、「開国日本と明治天皇の姿」、第二部は「日本における個人的な体験・観察・研究」である。

第一部の冒頭は、1912年（明治45年）7月30日零時43分の出来事から始まる。明治天皇の崩御である。明治天皇の崩御で文明開化の時代の終わりと考えている。

1912年7月30日の早暁、零時43分、日本のもっとも偉大な皇帝が息をひきとった。彼とともに帝国の長い歴史のうちもっとも光り輝いた明らかな政治（明治、1868—1912）の時代は終わった。

（中略）

人としてのミカドは、1604年から1868年まで、江戸の強力な軍事的支配者つまり篡奪者によって、油断なく見守られていた。この篡奪者は、自分の親戚たる封建領主たちによって、聖なる都、京都をとりかこんだのである。日本人大衆にとっては、ミカドは一個の人格であるよりもひとつの感情デアッタ。ミカドは伝統的に、「神々」の遺産をうけついで聖なるものの化身であった。京都の支配者ミカドはこの世を超越しており、江戸の支配者はこの世の中にいた。前者は何らの権力も掌握していず、後者は八万の個人的従者（旗本）とおびただしい数の封建的家来とからなる強力な軍隊を意のままに支配していた。このことは「ミカドは敬愛の的、将軍は恐怖の的」という、あらゆる家庭でよく知られた言いならわしによって、絵のように明らかに表現されていた。ミカドがかつて実際の支配者だったことは忘れられてしまっていた。

ところが、1912年7月の末には、万事がこれときわだった対照をなしていた。東京の宮城前の広場には幾千もの人々が集まっていた。ひざまづき、（ママ）あるいは祈りのために頭を低くたれて、彼らは皇帝の命のながからんことを目に見えぬ力に歎願した。彼らはさまざまの教義、教派のものからなっていたが、そこにはただひとつの心があった。仏教の僧侶も、神道の信者も、キリスト教徒たちも、ひとつになって、静かなる心からの祈りをささげていた。このようなことは「四海の内」に未だかつてないことであった。

（中略）

このようにして、明治、すなわち文明開化の時代は幕を閉じた。⁴⁹

つぎの引用は『皇国』の第二部から。2章でも触れた日下部太郎に関することである。日下部太郎はラトガース大学卒業直前に病のため客死する。彼を含め日本人7名は大学の傍のウィロウグローブという墓地に埋葬されている。彼は成績優秀であったために、ファイ・ベータ・カップ会員となった。グリフィスが福井に到着し、日下部太郎の父親がグリフィスに面会に来る。

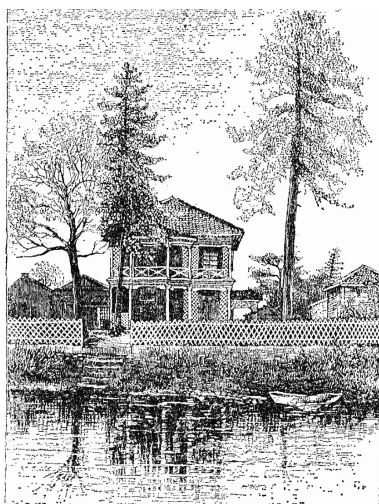
⁴⁸ W. E. グリフィス著 亀井俊介訳『ミカド 日本の内なる力』（研究社1972年）pp.5-6

岩波文庫版『ミカド』は研究社版から23年後の1995年の出版であるが、大幅な変更はほとんどない。pp.21-24

福井は日下部〔太郎〕の故郷であった。日下部は私の以前の学生であったが、ニューブランズウィックで死んだ。その父が私の来るのを聞いて、午後、会いに来た。漆塗りの盆に大きなみかんを山盛りにし、贈り物のしるしに妙な具合にたたんだ紙（熨斗）と、漢字の書いてある紙切れ（名刺）をつけて、下男の佐平から渡された。両手に顔をつけて、まるで床板にささやいているように身を伏せていた。贈り物を持って訪問するのが東洋の風習であった。日下部の父は表門からでなく裏門から入って来た。それは謙遜の気持と私への敬意を表すためであった。私は召使に命じて中へ通した。五十歳ぐらいの悲しげな表情の男が入って来た。岩淵の通訳でその身上話が始まった。その妻は息子が異国で外国人として死んだことを知って悲しみのあまり死んだ。二人の小さな息子が生きているが、他の五人の子は死んでいた。父は一人さびしく家に取り残されてしまった。私はラトガース大学のファイ・ベータ・カップ協会の金鍵を渡した。息子の太郎は1870年卒業の組で首席だったのでこの会員に選ばれていた。父はこの記章を額に捧げてうやうやしく受け取った。⁵⁰

もう一箇所の引用は福井での生活から。グリフィスの家には「おぶん」という名の11歳の女中がいた。彼女との言葉のやり取りの場面である。

古い屋敷の生活は毎日珍しいことばかりであった。どんな些細な出来事も日本人の生活、性格、考え方に新しい光線をさす隙間になった。ある日おぶんが夕食後、食堂に入ってきて、「オ、ママ」と答えた。「どういうことですか、娘さん。お母さんが生きていると思うのですか。どこでその英語をおぼえたのですか」。私がそこで日本語とアーリア系言語に類似点があるかの問題を考えると、その娘はからの皿をつかみ、からなのに驚いた様子をして出て行った。後で、「オ、ママ」とはご飯のことだとわかったが、そのご飯は近くの大きな寺に住みついでいて、よくこちらの庭に飛んでくる神聖な鳩の群にやる餌に使ってしまった。⁵¹



(福井での住居⁵²)

⁵⁰ W. E. グリフィス著 山下英一訳『明治日本体験記』（東洋文庫430 1984年）p.128

⁵¹ W. E. グリフィス著 山下英一訳：前掲書 p.144

⁵² W. E. グリフィス著 山下英一訳：前掲書 p.238

新渡戸稲造（1862年（文久2年）－1933年（昭和8年））は1900年（明治30年）に『武士道』を書いた。1905年に出たその10版の改定版には、⁵³ 英語読者のためにアメリカ人の視点から補遺をグリフィスが書いていることを最後に付け加えておく。

4-1-6. Edward Warren Clark (エドワード・W・クラーク) 1869年卒

EDWARD WARREN CLARK,

Born at Portsmouth, N.H., Jan. 27, 1849. At Rutgers, 1867-69. Episc. clergyman. Episcopal Divinity School, Phila., Penn. Author "Life and Adventure in Japan," "From Hong Kong to the Himalayas." Died, June 5, 1907.⁵⁴

エドワード・ウォレン・クラークは1849年（明治4年）1月27日にニューハンプシャー州ポーツマスで生まれた。ラトガースではグリフィスと同じ年の卒業となる。グリフィスの紹介で静岡学問所の教師となり、そこで物理と科学を教えるが、⁵⁵ 勝海舟（1823（文政6年）－1899（明治32年））が講師の依頼状をグリフィスに書いたことがきっかけである。日本に到着するときの興奮や横浜から静岡までの旅の様子は、1878年の著書に描かれている。日本に到着する冒頭の部分を引用する。

At early dawn on Wednesday, October 25th, I looked out of my state-room window from the steamer Great Republic, and lo! the snow-white dome of Fuji-Yama, the "Matchless Mountain" of Japan, rising like a temple of beauty above the clouds and mist: and as I caught sight of it the sun rose higher and higher, causing the mountain to brighten up, and its face to smile a welcome to us in our approach to the old, old world.⁵⁶

静岡で2年教えた後、開成学校に移動し、科学を担当する。明治天皇・皇后に謁見する際の通訳は開成学校長の畠山義成（1842（天保13年）－1876年（明治9年））が行ったが、彼はラトガースでの同級であった。

静岡に静岡英和女学院という学校がある。この学校は、もともとは、カナダのメソジスト教会から派遣されたジョージ・カックランとデビッドソン・マクドナルドの二人の宣教師が始まりと言われている。時は、1874年（明治7年）である。これを以って、伝道の始まりとしているが、実は、それよ

⁵³ <http://chiri.let.hokudai.ac.jp/~you/nitobe/data/bushido.html> (2009年8月25日)

⁵⁴ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.149

⁵⁵ 静岡での理化学の授業については、藤原三雪氏の次の論文が参考になる。

「E.W.クラークの静岡学問所付設伝習所における理化学の授業—W.E.グリフィス宛の書簡から—」『武蔵丘短期大学紀要』第5号 1997年

⁵⁶ E.W. Clark: *Life and Adventure in Japan*, American Tract Society, 1878 p.11

りも2年早く着任したエドワード・ウォレン・クラークにより宣教の下地は耕されていた。⁵⁷

開成学校で1873年(明治6年)から1875年(明治8年)まで教えた後日本を離れた。1907年ニューヨークで死亡する。

著書 *Life and Adventure in Japan*, American Tract Society, 1878

From Hong-Kong to the Himalayas: or, Three thousand miles through India, American Tract Society, 1880

4-1-7. Martin N. Wyckoff (マーティン・N・ワイコフ) 1872年卒

MARTIN NEVIUS WYCKOFF,

Born at Middlebush, N.J., Apr. 1850. Missionary. R.C.A. Adjunct Prof. Physics and Laboratory Assistant, Rutgers. 1889-90. A.M. (Rutgers, 1875) D.Sc. (Rutgers, 1895). Died, Jan. 27. 1911.⁵⁸

M.N.ワイコフは1850年に4月10日にニュージャージー州ミドルブッシュに生まれた。もともとはオランダの出で、父親はダッチ・リフォーメド教会(オランダ改革派教会)の執事や長老として奉仕をしていた。ラトガースカレッジを1872年に卒業した後にグリフィスの後任として福井の藩校に赴任し、2年間在職する。故国を発ったのは卒業式の翌日、1872年(明治5年)6月21日。7月24日の午後横濱に到着。出迎えたのはグリフィスであった。福井に向かうのは数日後のことであるが、7月28日(月)付けの両親宛の手紙を一部引用する。

1872年(明5)7月28日月曜日の夕 江戸にて

父母上様

私は来る金曜日に福井に向ひます。大阪までは汽船にて、それから先は陸路です。さて、私共が横濱に着いたのは、去る24日の午後で、グリフキス君が船まで迎へて呉れ、直ちに上陸江戸へ行きました。(中略)福井へ案内する役人が、木曜日に来訪しましたので、昨日契約書の相談をなし、早速それを横濱の米国領事に見せて認可をうけましたから、この上は更に或る役所の手続さえ了れば、それですっかりよいのです。この役人は、私に旅費と、1ヵ月分の給料と合わせて七百円呉れました。仍てこの手紙と同時に、第一回分とし為替にて四百円御送金いたします。⁵⁹

⁵⁷ 静岡英和女学院百年編集委員会(編)『静岡英和の百年』(昭和62年) p.5

この項目は重久篤太郎『明治文化と西洋人』(思文閣出版1987年) pp.11-12と嶋田正(編集代表)『ザ・ヤトイー お雇い外国人の総合的研究』(思文閣出版1996年)に収められているダニエル・メトロ「異文化間の相互イメージの発展とお雇い外国人の役割—エドワード・ウォレン・クラークの働き—」 pp.233-248、及び静岡学問所のホームページも参考にした。

<http://www.asahi-net.or.jp/~kw2y-uesg/oyasumi/gakumonjyo/gakumonjyo.html> (2009年8月26日)

⁵⁸ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.156

赤羽絹子「M・N・ワイコフ」『昭和女子大学近代文学研究叢書』(第2巻)(昭和34年)も参考にした。

⁵⁹ 赤羽絹子：前掲書 pp.140-141

東京滞在中の逗留先はグリフィス宅であったが、食事はフルベッキの家で取っていることも同じ手紙の中に書いてある。

福井には2年いた。1874年(明治7年)9月16日付けで新潟外国語学校へ行く。校長美穂健道が文部大輔田中不二麻呂宛に明治8年2月26日付けで提出した明治7年中の新潟英語学校年報には、ワイコフを採用したことや教授内容が書かれている。当時新潟英語学校の教員は二等教諭1名、教諭心得雇4名、外国人教諭1名の6名であった。ワイコフの月給は250円であった。⁶⁰ 1876年(明治9年)には東京大学予備門講師となり、東京に移った。翌1877年に帰国し、ラトガースカレッジの物理学講師に就任するが、1881年(明治14年)に神学校設立のために再来日する。その年の10月3日に横浜山の手48番地に「先志学校」が設立される。この学校は、1883年(明治16年)に築地大学校と合併し東京一致英和学校となり、1886年(明治19年)に神田予備校と合併し明治学院となった。ワイコフは明治学院の理事となったが、理事会の中には改革派を代表し、ワイコフの他にバラ、フルベッキが選ばれた。ワイコフは1911年(明治44年)1月27日に死亡した。彼の墓は芝白金の瑞聖院内ミッション共同墓地にある。

著書 『英作文初歩 *English Composition for Beginners*. Prepared for Japanese Students by M. N. Wyckoff, A. M., Teacher in Meiji Gakuin . 丸善商社発兌 明治18年、明治21年(4版) 明治22年12.4 x 18.7cm. i+iii+117+i pp.⁶¹

4-1-8. Howard Harris (ハワード・ハリス) 1873年卒

HOWARD HARRIS,

Born at Belleville, N.J., July 29, 1848. Clergyman. R.C.A. Missionary, Japan, 1884-1904. N.B. Sem., 1876. A.M. (Rutgers, 1876). Died, Jan. 13. 1916.⁶²

ハワード・ハリスは1848年7月29日にニュージャージー州ベルビルで生まれた。ラトガス大学卒業は1873年。ニューブランズウック神学校を終えたあと、ニューヨーク州ホーソーンで聖職者となる。1884年(明治17年)に長崎に到着。そこにはヘンリー・スタウトがいた。1885年(明治18年)にハリスは東京へ変わる。明治学院との関係が始まる。1900年(明治33年)まで東京滞在。帰国後は再びホーソーンへ。後にカリフォルニアに移る。一時ハワイのカフルイにある日本人の教会に赴任したこともある。1916年1月13日にカリフォルニア州ロスアンゼルスで死亡。67歳であった。

⁶⁰ 川澄哲夫(編)『資料 日本英学史 下』(大修館書店1988年) pp.904-906

⁶¹ 豊田実『日本英学史の研究』(千城書房 昭和38年) p. 201、p.617

⁶² *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p. 158

4-1-9. Eugene S. Booth (ユージーン・S・ブース) 1876年卒

EUGENE SAMUEL BOOTH,

Born at Trumbull, Conn., Aug. 16, 1850. Clergyman, R.C.A. Missionary to Japan.

Principal, Ferris Seminary, 1882- . N.B. Sem., 1879. A.M. (Rutgers, 1879).⁶³

ユージーン・S・ブースは1859年8月16日にコネチカット州トランビルで生まれた。1876年にラトガース大学を卒業。ニューブランズウィック神学校を終了したのが1879年。同年(明治12年)妻と一緒に長崎に到着するが、ヘンリー・スタウトの後任であった。長崎滞在は1881年(明治14年)までで横浜に向かう。ブースは宣教師として1922年(大正11年)まで日本に滞在する。1931年にニューヨークで死亡する。80歳。

ブースの滞日は43年に及ぶが、そのほとんどは横浜である。妻のエミールはフェリス・セミナリーと関係したが、ユージーン・ブースも同じである。

ここでフェリス女学院について書く。フェリス女学院はメアリー・キダー(Mary E. Kidder、1834-1910)が教育事業を始めた1870年(明治3年)を始まりとする。キダーはS.R.ブラウンと共に1869年(明治2年)に来日する。ブラウンはアメリカのオランダ改革派教会が派遣しており、日本での伝道のためにアメリカから来日した6名の宣教師の内3名は改革派であった。

キダーは新潟に赴任するのであるが、横浜に移る。そこでヘボン塾を引き継ぐこととなった。その年が1870年(明治3年)である。ヘボン塾は1863年(文久3年)に開かれたものであるが、キダーは女子教育に専念するために、男子生徒はジェームズ・バラの弟のジョン・バラが引き継ぎ、バラ校と呼ばれた。このバラ校は後の明治学院となる。フェリス女学院はヘボン塾から生まれたことになる。この学校は、親子二代にわたって改革派教会外国伝道局総主事をつとめた父アイザック・フェリスとその子ジョン・メーソン・フェリスにちなんで名づけられた。父親は、ブラウン、フルベッキ、シモンズを日本に送り、息子はキダーを派遣した。

E.S.ブースは1881年(明治14年)から1923年(大正11年)の間フェリス女学校の校長としてその発展に寄与するのであるが、ブースの一番の功績は、従来慣行で行われていた学科課程、規則を整備して、制度を確立して、教育内容を充実させたことである。フェリス女学院関係の書物を紐解くと、たとえば、『フェリス女学院100年史』⁶⁴では、「制度の確立」という章に、また、『フェリス女学院110年小史』⁶⁵では「ブース着任とフェリスの発展」という章に彼の功績が書かれている。

⁶³ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p. 167

⁶⁴ フェリス女学院100年史編集委員会(編)『フェリス女学院100年史』(1970年) pp.47-81

⁶⁵ フェリス女学院110年小史編集委員会(編)『フェリス女学院110年小史』(1982年) pp.19-32

その他に鈴木美南子「E・S・ブースのキリスト教女子教育理念」『フェリス女学院大学紀要10』(1975年 pp. 25-45)を参考にした。

4-1-10. Nathan H. Demarest (ネイサン・H・ディマレスト) 1880年卒

NATHAN HENRY DEMAREST,

Born in New York City, Feb. 26, 1858. Clergyman. R.C.A. Missionary to Japan, 1883-90. 1912-13. N.B. Sem., 1883. A.M. (Rutgers, 1883).⁶⁶

ネイサン・ディマレストは1861年7月3日にニューヨークで生まれた。⁶⁷ ラトガース大学卒業は1880年。ニューブランズウィック神学校は1883年に終える。1883年(明治16年)から1889年(明治22年)まで改革派教会から派遣され長崎に滞在する。帰国後はニューヨークのロックスベリーで牧師をつとめるが、1917年2月17日に死亡。55歳であった。

それが正しいとなると、彼は、えらく若くして大学を卒業したことになる。いろいろと探していたら、*The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa A Year Book for 1913* という物に出くわした。これは、日本と朝鮮半島(もちろん現在の北朝鮮を含む)、そして台湾でのキリスト教の状況を報告したものであるが、Nathan H. Demarestのことが死亡記事欄に記載してあった。⁶⁸ 1917年の2月17日に死亡していた。彼は1861年生まれとなっている。その記事にはラトガース大学卒業が1880年でクラスの中で一番若いと書いてあるので、先の疑問もこれで解決した。1917年2月18日付けのニューヨークタイムズの死亡欄には、次のような記事で彼の死が告知されている。

Rev. N.H. Demarest Found Dead.

The Rev. Nathan H. Demarest, a missionary here for many years, was found dead yesterday from gas poisoning in his room at the home of his sister, Miss S.E. Demarest, at 247 Bedford Avenue, Mount Vernon. Coroner Livingston of New Rochelle decided that Mr. Demarest's death was accidental, as he had no reason for ending his life. He was no reason for ending his life. He was in his fifty-sixth year.⁶⁹

5. 結 語

1985年(昭和60年)10月5日から4日間、福井県福井市で第二回「ザ・ヤトイ」国際シンポジウム

⁶⁶ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS COLLEGE (originally Queen's College) in New Brunswick, N.J., 1766-1916* p.180

⁶⁷ *Catalogue of the Officers and Alumni of RUTGERS* には1858年生まれとあるが、1917年2月18日付The New York Times の死亡記事から判断して1861年生まれと記述してあるHigashiyamate Biographiesの記事が正しいと判断した。http://www.nfs.nias.ac.jp/page026.html (2009年8月27日)

⁶⁸ Edwin Taylor Iglehart (ed.) :*The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa A Year Book for 1913*, Conference of Federated Missions Japan, 1918. p.292

⁶⁹ *The New York Times Archives*

が開催された。2章でも触れているように、「お雇い外国人」という言葉はとても早く英語に定着した日本語であることがわかる。この4日間のシンポジウムは『ザ・ヤトイ お雇い外国人の総合的研究』⁷⁰としてまとめられた。

さて、このシンポジウムが福井で開催されたのは、福井がWilliam Elliot Griffisゆかりの地であったからで、グリフィスと福井を結んだ縁は、日下部太郎であったことも既に述べた。この福井でのシンポジウムが「第二回」と銘打たれているのにも理由があって、1967年（昭和42年）の4月26日から3日間、ラトガス大学の創立200年記念式の一部として、国際会議が開催されたのである。その国際会議は、アードス・バークスが企画したのであるが、その会議を「文化交流100年記念祝賀、ラトガス・日本会議」と称したものであった。その会議を第一回とみなし、福井でのシンポジウムを第二回とした。その1回目の研究発表は*The Modernizers Overseas Students, Foreign Employees, and Meiji Japan*（邦題は『近代化の推進者たち－留学生・お雇い外国人と明治－』⁷¹）という本にまとめられている。

この2回の会議と2冊の書籍は相補的な深い関係を持っている。西洋文明と接触してまだ間の無い日本がラトガス大学と繋がった不思議な縁。今回ここにまとめたラトガスの10名の卒業生が果たした役割は福井だけに留まらない。

梅溪昇は『お雇い外国人』⁷²という本を出版したが、その本は「明治日本の脇役たち」と副題がついている。近代化を急ぐ日本は、お雇い外国人の採用と日本人を留学させる二つの方法を取り入れた。今回、拙論では、ラトガス大学の卒業生で、卒業後に来日した10名を取り上げたが、ラトガスを目指した日本人もいる。それらの日本人については改めて論じることとする。また、ラトガス大学関係者がなぜこれほど幕末・明治の日本と関係が強いのはオランダ改革派の宣教師が関係している。宣教師の果たした役割についても今後深く掘り下げて考えてみたい。

⁷⁰ 嶋田正（編集代表）『ザ・ヤトイ－お雇い外国人の総合的研究』（思文閣出版1996年）

⁷¹ Adath W. Burks (ed.) : *The Modernizers Overseas Students, Foreign Employees, and Meiji Japan*, Westview Press 1985（梅溪昇（監訳）『近代化の推進者たち－留学生・お雇い外国人と明治－』（思文閣出版1990年）

⁷² 梅溪昇『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』（日経新書 昭和40年）

